

学校行事からみた学社融合の在り方

—小中合同運動会をとおして考える—

宗 本 和 博

(北海道深川市立多度志中学校)

はじめに

小さな村や地域ではおそらくどこでも行われているに違いない小学校と中学校の「合同運動会」を学社融合の事例として、あえて取りあげてみたい。

小中合同運動会は、当地域ではもちろん初めての試みである。当地域で小中合同運動会の実施について話題にのぼったのが平成13（2002）年。それからわずかな準備期間を経て小中合同運動会を実施することができた。もとより地域の大きな反対もなく実施にまで持っていったのは、地域の方々の強い後押しと小学校、中学校の前向きな姿勢があったからであろう。では、なぜ地域や保護者から、さほどの抵抗もなく実施できたのか。実施してみて、その評判は上々であったが、そのようなささやかな行事がどうしても地域的に評価されたのか。

この小中合同運動会は決して先導的・モデル的事業とはいえないが、結果として「学社融合」の理念に最もよく沿ったものになっていたとしたなら、この小中合同運動会が、今後地域における「意図的に集う事業」として地域に育まれ、地域文化として将来、伝統と呼べるものになる可能性をもっているのではないか。

本稿では、以上のような考えを踏まえ、本事業にまつわることがらを整理しながら、「学社融合の在り方」を考えてみたい。

「多度志」の様子

北海道は石狩平野の北限に深川市がある。その深川市からさらに北に13キロ、幾つかの小さな峠を越えるとそこに小さな盆地が見えてくる。そこが多度志である。

「多度志」は当初、アイヌ語のタトシュナイ（樺の木が多い沢）から転じた地名で、明治29（1896）年に石橋末吉が拓いた石橋農場周辺を指していた。その後開拓が進み村制をしく際に、当時それぞれに独立していた幾つかの郷を束ねて（現在の多度志全域が）「多度志村」となったのである。現在、深川市の一地域として「深川市多度志」となっている。⁽¹⁾

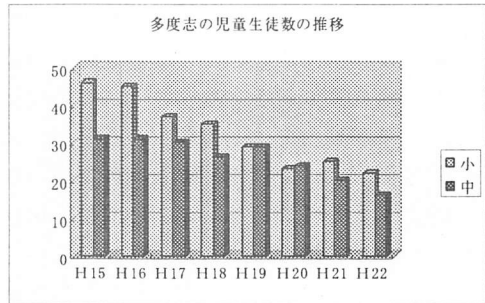
多度志では、開拓当初、いわゆる「華族農場」にみられるようなアメリカ式大農場が志向された。しかし、すぐに人びとは畑作や稲作づくりに挑戦し、艱難辛苦の末、今では見渡す限りの美田を作りあげている。現在、「きらら397」「ほしのゆめ」「ワイン用葡萄」「花卉」など多様な農作物が作られている。特に蕎麦の作付け面積は隣町の幌加内町にわずかに及ばないものの全国第2位である。

多度志の人口は最盛期の8,000有余人から現在約1,200人弱と激減している。しかし、いわゆる過疎地の暗さはあまり感じられない。それは農業の大型機械化により10ha～30haなら一人でも耕すことが可能なこと、故に農業人口の絶対数が減っても農業自体に活気が失われていないこと、また、自動車の普及やインターネットなどの通信手段の発達によりかつての僻地という感覚をほとんどの人がいだいていないことなどによるものと思われる。

このような多度志に住む人びとの人となりであるが、「住民は人情に厚く、物静かな中にも開拓精神に富み、学校教育への関心も高く、非常に協力的である。また、地理的条件、歴史的條件から『おらが多度志』の強い郷土意識・連帯感をもっている。」⁽²⁾

学校教育等関係は、保育園、小学校、中学校が各1校（園）ある。子ども

たちはそういった地域に育まれているため、総じて明るく、率直である。また地域の伝統芸能である獅子舞や多度志太鼓などにも多くの子どもたちが大人たちの指導を受け、活動している。なお、右表にあるように確実に児童・生徒数が減少し、平成16年度（2004）から小学校は一部複式学級となっている。近い将来、中学校も複式になることが避けられない情勢である。



小中合同運動会について

1 小中合同運動会が実施されるまで⁽³⁾

児童生徒数の減少は、保護者の絶対数の減少でもある。ほとんどの保護者は二人以上の子持ちなので、いきおいPTA等における奉仕活動等では小学校だけでなく中学校にも出役しなくてはならず、保護者の負担をますます大きくしていた。また運動会の時期が花卉の収穫期に重なるということもあり、小・中学校のPTA会長より「合同運動会」の要望がだされたのが平成13（2002）年のことであった。

平成14（2003）年12月19日（木）、この件で初めて検討会議が小学校で開かれた。そこでは小中とも次年度（15年度）は、それぞれで実施するが、同年度中に合同で実施できる体制をつくっていくこと、名称は「合同運動会推進委員会」とすること等々が確認された。

平成15（2004）年4月9日、中学校にあっては校長（筆者）がPTA総会のあいさつで小中合同運動会について触れ、「今年度は平成16年度実施をめざした取り組みを行っていく」ことを明らかとした。それを受けてPTA会長（中西信幸氏）からも「これはPTAからの要望でもあり、引継もあることからPTAとしても取り組んでいきたい」と支援協力の意が示された。後日小学校（宮川央子校長）のPTA総会においても同様の取り組み

がなされた。それを受けて、平成15(2003)年7月17日に第1回合同運動会推進委員会が開かれ、まず合同運動会の「基本的な考え方」3点が確認され、原案作りがすすめられることとなった。

(1)合同運動会案は、運動会方式をベースに作成する。

(2)合同案は、両校の理解と納得が得られる手順で進める。

(3)PTAとの関連部分においては、適宜役員会(PTA会長)にも相談しながら進める。

また、小学校および中学校それぞれ合同運動会の目標を定められた。⁽⁴⁾

どんな事業も計画立案から実施・反省までのストーリーを描ける人材がいるかないかがその事業の正否を決める。その意味からいえば、推進委員会に堀川委員長をはじめとして先を読める人材を得たことは大きかった。特に「基本的な考え方」や「小中のねらい」を定め合同運動会の性格を明確したことで、以後の作業が円滑にすすむこととなったと思われる。

2 小中合同運動会の実施と反省

合同運動会はPTAの全面的な協力を得て実施された。ほぼ全員の保護者が忙しい農作業の合間をぬって子どもたちと一緒に大会準備をしてくれた。というよりはむしろ積極的に作業をしてくれた。例えば、雨模様とみた保護者たちは、水はけの良くない小学校グラウンドに軽トラックとビニールハウスのビニールを持ち込み、あっという間にトラック全面にビニールを敷きつめてしまったのである。これなど多度志ならではの光景であろう。

当日、保護者のみならず地域の多くの方々が参観し、大盛況。まさに地域の一大イベントという景観を呈したのだった。



小中合同選手宣誓



児童・生徒による二人三脚

この合同運動会の教育的意味も大きい。まず、小学生が中学生の「きびきびした動きや応援団の迫力に圧倒されていた」「生徒の手でどんどん進める大会運営を目の当たりにした」という感想にもあるように小学生にとってはいつも見知っているお兄さんお姉さんとは違う一面をみて大いに感じるものがあったようだ。また中学生にとっても、小学生低学年の児童のお世話や後輩に見られていることへの責任感、それに伴う行動など、中学生がぐっと大人になれるチャンスでもあった。

第1回、第2回の大会の反省をみると、両回とも概ねよかったという評価であった。しかし、第1回目の反省に保護者から「小中に対して、子どもたちにとって合同であることがよいことなのか？失われているものもあるのではないか」という意見があった。この意見はしっかり肝に銘じておかなければならない。どんな事業であれ、新しいことを成し遂げるよろこびはあるが、同時にリスクは避けられないものだからである。小中合同運動会についても同じことがいえるだろう。何かを得たら何かを失う、この道理を改めて噛みしめたい。

合同運動会の地域的役割

多度志小中合同運動会は前述したように、早くも地域にとっての大きな行事になってきたようだ。それはもしかすると平成13（2001）年まで27年間続いてきた「町民運動会」の復古版という印象を抱いて人もいるかもしれない。

その「町民運動会」がどうして休止になったのか、そしてその町民運動会が地域にとってどれほどものだったのか、当地区の体育協会会長である結城氏が次のように語ってくれた。⁵⁾

結城氏によると、各地区にいた世話役がいなくなった、人集めが大変になった、勝負にこだわすぎる等々の理由により「割とあっさりを取りやめることとなった」という。しかしその町民運動会が、実は全く別の意味で地域にとって大きな役割を果たしていたことを今日になって改めて思い知ったというのである。

それは、かの町民運動会が、地域で老若男女が相集うほとんど唯一の機会

となっていたこと。多度志地区全員が爆発的なエネルギーを放散して、一つの目標のためにそれぞれの地域の一人ひとりの心をひとつにして取り組むことのできた事業になっていたこと。運動会における感情的なぶつかり合いや諍いが、地域全体の「抑制」の大切さを実感させる契機になっていたこと。等々について深く認識していなかったというのである。

そもそも地域の伝統と歴史の浅い（100年足らず）北海道にあっては、「祭り」の他町民大会や青年陸上大会、あるいは学校で行われる運動会などが人びとの集まる行事であった。多度志も例外ではなく、町民運動会が最も人の集う行事だったのである。

しかし、その町民運動会の役割を新しく始まった多度志小中学校合同運動会がそのまま担うことはできないだろう。現在の小中合同運動会はその主体が小・中学生である。そして学校の教育活動の一環である。いきおいかつてのように飲酒や熱狂、時には興奮した怒声も許されるはずはない。

しかし、地域の人々が集うこと、子どもたちの活躍を親戚一同、隣近所一同で楽しむこと、これらの役割は果たせるだろう。そして今後この合同運動会は、学校の教育活動であるとともにこの地域の中心的な「意図的に集う事業」として、ますますその意義を高めながら、地域に大切に育てられるのではないと思われる。

多度志の地域を支える力

1 多度志地域振興会

その他多度志には他地域にあまり例をみないと思われる「多度志地域振興協議会」（板垣淳一会長）⁶⁾がある。この「多度志地域振興協議会」（以後「地域振」という）は、昭和45（1970）年、農民協議会、商業団体、民生委員、老人クラブ、町内会等多度志にあるほとんどの団体・機関を会員とする組織である。確かに設立時は当地区から議員を出すことを会の目的のひとつにしてあったが、現在ではその思惑をはるかにこえて、この地域振がこの地域の生活課題を集約する場であり、「地域ふれあいセミナー」を主催するなど生活上の意見や情報を交流する場としてなくてはならない組

織となっている。また年1回の総会は参加者数が300人以上もあり、その盛況ぶりからみても、さながら地域振の会長は「かつての町長のような存在」（参加者の評）である。おそらくこの意識は、先にも触れた「おらが多度志」という郷土意識に根ざしたものであろう。

この地域振総会において、小・中の学校生活をスライドや映像で報告する機会を与えられている。多度志の児童・生徒の活躍の風景はここに集う人びとにとって、未来を感じるひとときとして大きなよこびであろう。

2 多度志の教育を考える会

多度志の教育を考える会は、保育園、小学校、中学校が連携して取り組む事業で、事務局は各学校およびPTA持ち回りで年1回、開催するもの。保護者、教師が相集い子どもたちの教育について語り合う、という趣旨で平成11（2002）年に始まった。最近は「食育」「命」などのテーマで地域の方々の参加も得て実施しているが、実際のところ保護者の年齢差も大きいことから共通のテーマを決めるのにかなり苦戦しているのが現状だ。しかし、三者の子どもたちが合わせて100人に満たないという好条件、皆気心を知り合っている仲間であるし、その意義についての理解をしているので今後も地域では大切な事業であり続けると思われる。

このように地域から向けられる小中学校への温かいまなざしそれこそが、実は地域の教育力の高さを示しているのではないだろうか。

高齢者を含めた地域の人々が柔和で温厚だとすれば、そのこと自体が地域の余裕と人びとの生活が平穏だということを示している。生活が平穏で皆が仲良い関係であれば、子どもたちがその好ましい影響を受けない訳がない。結局子どもたちの落ち着きや優しさは地域の落ち着きであり優しさなのである。

子どもたちの落ち着きや優しさは、この地域によって育まれたものであるが、その良さは学校生活でも活かされている。当校の生徒について来校者は「あいさつが立派ですね」「少人数なのに校舎がきれいですね」「生徒と先生の関係が素晴らしい」などと異口同音に褒めてくれる。そしてコンピュータ室が施錠されていないこと、廊下の小さな棚に模造紙や色紙が鍵もなしに置

かれていることなどを見て、ここにいる生徒がどんな子どもたちなのかを得心するのである。

「かつて、結構あったこの多度志のような風景の学校が本当に少なくなった」という嘆息は、逆に私たちの求めるべき方向への確信を与えてくれる。

良い環境で子どもたちを育てていくためにわれわれ大人が何をしなければならぬのか。今はもう大きな街で勉強させることよりも、多度志という地域で多度志の子どもたちを育てる方がより子どもたちの将来のためになるということをみんなが思い始めている。多度志の先人の歴史や伝統を学び、おじいさんやおばあさんを大切し、お父さん、お母さんを尊敬しながら育つ子どもたちこそが、実は北海道を愛し、日本を愛し、世界にある多様な考えをも受け入れる国際派日本人として生きていけるのではないか。

学社融合：学校からのアプローチ

人間は生きている限り、常に学び続ける存在である。生涯学び続けるのが人間であり、学ぶということが生きている証でもある。どんなことがらをどのように学ぶかは時代とともに変わってきたが、学ぶこと自体は今も昔も変わらないものである。そしてこのような人びとの生涯にわたる学びを確固たるものとするために「教育」という営みがある。

アドルフ・ポルトマンの「人間はどこまで動物か」に見られる生理的早産説やシング牧師が保護したアマラとカマラにまつわる例を見るまでもなく、人間は教育によって人間になるのである。

教育は計画的・系統的・意図的・継続的なものであるが、公的な意味で求められる教育の主な役割は独り立ちできる人間を育てること、また心身ともに健康な国民を育成することである。

一方、変化の時代にあって教育の具体的在り方が問われるようになっていく。「少子高齢化社会の進行と家族・地域の変容」「行動情報化の進展と知識社会への移行」「産業・就業構造の変貌」「グローバル化の進展」「科学技術の進歩と地球環境問題の深刻化」「国民意識の変容」など現在指摘される時代の潮流を踏まえて、どのような人間像を求め、そのためにはどのような教育が

必要なのか、そして時代を担う子どもたちにどんな資質を身につけさせたらよいのか等々である。

E・H・フロムは「持つ」生き方ではなく「在る」生き方を説いたという。例えば、上記の「グローバル化の進展」に対応できる日本人の「在る」生き方とは何か、そのための資質として何が求められるだろうか。

「在る」生き方とは、つまり子どもたち自身がそれぞれの課題について、広い視野でものごとをとらえることのできる感性、考えて考えて考え抜く粘り強さ、そしてそれを支える豊かな想像力、それらが総合的に発揮される状態をいいたい。また経済や文明の「グローバル化の進展」に対応できる日本人とは、実は真に生まれ育った地域の伝統文化をしっかりと身につけ、それらを世界に向けて堂々と語る者、語り合える者、そういう誇りをもった者のことだととらえたい。⁽⁷⁾

まとめ

学校をはじめ地域や家庭における教育の課題解決のためには、実は学校教育がより一層専門的に高まること、地域も生産性を高め、日常生活（世間）の秩序を保つこと、家庭教育は家族における役割分担を明確にし、躰教育を確固たるものとするのが大切になってくる。つまり、三者は意識して一方で互いにボーダーフルとなり、他方で互いにボーダーレスにならなければ、真の意味の「学社融合」の理念が生きてこないのではないか。

学校教育についていえば、生涯学習の考え方に依拠した「開かれた学校」がますます増えていくだろう。しかし、ただ単に学校を開放すれば良いというものではない。学校を開くということは、家庭や地域に対する学校教育活動の説明責任、情報提供、外部評価など新たな課題に対応するということであり、いってみればそれらの試練に耐える学校づくりも求められるということなのである。

また、多度志を艱難辛苦の末に切り開き、今や見渡す限りの美田をつくりあげたのは多度志に生きる人びとである。その方々が人生において何を考え、何に悩み、何をよろこびとし、どのようにして生きてきたのか、数限りない

問題をどう乗り切ってきたのか、それらのことを学ぶこと、つまり多度志の歴史と伝統を学ぶことこそが、子どもたちの生きる「よすが」となるはずである。

この良い環境で子どもたちをどう育てていくのか、そのためには地域をどうしていかなければならないのか、そのことを問うことの中で、必然的に学社融合の理念が生きて輝いてくる、つまり問い続ける者だけが、問い続ける地域だけが学社融合をまさに体現できるのである。

<注記・参考文献>

- (1) 「多度志町史」(昭和41年版)
- (2) 「多度志中の教育」(平成17年度版) P10
- (3) 「第1回多度志小中運動会実施報告書」
- (4) 同上 P4

小学校の目標①日常の学習の成果を発表・表現する。②集団の一員としての自己の役割を果たさせる。③競技種目の決定、応援、練習の計画立案に参加させ、自主性、積極性、協力的態度を育てる。中学校の目標①種目練習していく過程で、体力や競争力を高め向上する喜びと、仲間と一緒に努力する喜びを体験させる。②保護者や地域の方々との交流の場として、積極的な参加を促す。③生徒の手に委ねる行事として押さえ、その企画運営を通して、生徒の自主性・計画性・創造性を伸長させ、協力性・責任感を養う。④競技のマナーを学び、相手を尊重する態度を育てる。⑤安全に十分留意して、練習や当日の種目に取り組ませる。

- (5) 結城氏より聞き取り調査
- (6) 地域振興会「意見交流会」議事録
- (7) 「多度志中の教育」(平成17年度版) P11-P12

<その他参考文献>

- ・ 『教職員服務ハンドブック』補完資料」(平成17 深川市校長会)
- ・ 「学習活動支援と参加体験型学習」(平成11 学習方法開発研究会)
- ・ 「学社融合の推進に関する調査研究」(平成13 北海道社会教育総合センター)
- ・ 「日本教育」(日本教育会)他

編集規定

1980年11月28日 理事会決定

1982年10月29日 理事会改正

1985年 9 月 5 日 //

1987年 5 月 9 日 //

1987年 8 月22日 //

1. 日本生涯教育学会年報 Bulletin of the Japan Association of Lifelong Education は、日本生涯教育学会の機関誌で、原則として1年に1回発行する。
2. 本年報には生涯教育に関する未公刊の論文・学会報告・その他会員の研究活動についての記事を掲載する。
3. 本年報を編集するために編集委員会をおく。編集委員会は、常任理事5名および地区理事をもってあてる。上記5名は常任編集委員会を構成する。
4. 本年報に原稿の掲載を希望する会員は、別に定める投稿規定および各年度の編集方針に従い、原稿を学会事務局へ送付するものとする。
5. 投稿論文の採否は常任編集委員会によって行う。
6. 掲載予定の原稿について編集委員会は執筆者との協議により内容の変更を求めることがある。
7. 本誌に掲載された原稿は原則として返還しない。

投稿規定

1. 投稿論文は生涯教育に関する未公刊の論文に限る。
2. 原稿用紙・分量
原稿は、A4判・横書き、1ページ34字×31行（1054字）の規格で印字したものである。

原則として、本文（図・表・注を含む）は16枚程度とする。ただし、年報編集委員会で特に枚数を指定したものはこの限りではない。

所定の枚数を超えたものは書き直しを求めるものとする。書き直し後も、なお枚数がオーバーする場合には採用しないことがある。

なお、原稿用紙による投稿の場合は、400字詰原稿用紙で40枚程度とする。

3. 別紙

論文に次のような別紙1部を添える。

ページ1 論文名・執筆者名・所属

2 欧文論題名（英・独・仏語のいずれか）・ローマ字表記の姓と名

3 和文要旨（800字前後）

なお、希望により和文要旨を翻訳した欧文要旨を添えてもよい。

4. 注記・引用文献

一括して本文の後には紙葉を含めて注記番号順に列挙する。

引用文献の注記は、原則として以下の要領による。

<単行本の場合>著者，書名，発行所，発行年，頁の順に記す。

例(1) 生涯 学『生涯教育の未来』今日教育社，1985（または，昭和60年），3-7頁

例(2) Shougai Manabu *The Future of Lifelong Education*. Today's Education Press. 1985 pp.3-7.

<論文の場合>著者，論文名，掲載紙誌，巻，号，発行年，頁の順に記す。

例(3) 生涯 学「生涯教育の未来」（『日本生涯教育学会年報』10-2，1989年）123頁

例(4) Shougai Manabu “The Future of Lifelong Education” in *Bulletin of the Japan Association of Lifelong Education* 10-2 1989 p.123.

<辞典，新聞，雑誌等の記事で，執筆者が明記されている部分を引用する場合>執筆者も注記する。

例(5) 『生涯教育大辞典』今日教育社，1990年，100頁（生涯 学執筆）

<インターネットから引用する場合>論文，記事，データベース名に加えて，ホームページのタイトルと作成者名，URLならびに参照日も注記する。

例(6) 「生涯学習事業データベース」，生涯教育学会オンライン，日本生涯

教育学会, <http://shougai.gakkai.jp>, 2003年4月1日参照。

例 (7) Shougai Manabu “The Future of Lifelong Education” in *Digital Bulletin of the Japan Association of Lifelong Education*, <http://shougai.gakkai.jp/bulletin/>, 1 April 2003.

5. 参考文献

必要があれば、注記・引用文献の後に紙葉を改めて、参考文献と表記して列挙する。

6. 図・表

図・表があるときには、第○図・第○表と表記して題名を添える。その注は下部に付記する。文中に図・表を入れ込んだレイアウトができない場合は、注記・引用文献（または参考文献）の後に、1件1枚の割合で図・表を添付する。その場合、本文には図・表の挿入場所を赤色で指定すること。

7. 使用漢字・仮名づかい

常用漢字・現代仮名づかいを原則とする。

8. 数字

特殊な場合を除き、数字はアラビア数字を用い、半角（原稿用紙の場合はひとマスに2字の割合）で記入する。

9. 欧語

半角（原稿用紙の場合はひとマスに2字の割合）の活字体で記入する。

10. 引用

引用文が長く独立した段落にしたいときは、その前後に各1行の間隔をおき、かつ、原稿用紙の左端ひとマス全体を空白とする。

11. 原稿は、本文4部（コピー可）および別紙1部を送付する。

12. 詳細については、投稿申込者に対して改めて通知する。

13. 締切日

投稿論文テーマは3月末

論文原稿は特別の場合を除き5月末

14. 送り先

学会だよりで通知する。